

福井時代の横井小楠

— 漢詩を通して —

野口宗親

はじめに

横井小楠が人生において、優れた政治・経済・教育に関する能力を遺憾なく發揮し活躍しえたのは、晩年五十歳の時、安政五(一八五八)年に藩校明道館の賓師、藩主松平春嶽(慶永)の政治顧問として福井藩に招かれ、文久三(一八六三)年に福井藩挙藩上洛計画の失敗により熊本に帰国するまでの約五年間であったことは周知の通りである。

福井時代の横井小楠については、これまで多くの先行研究があつて、書簡や「国是三論」などの著作、福井藩の資料などにより、政治・経済・教育活動や思想面など、さまざまな面から考察がなされている。しかし、まだ明らかになっていない点も多い。

特に福井時代に詠んだ漢詩については、これまで触れられることは少なかった。小楠の漢詩集『小楠堂詩草』(民友社影印、昭和四年)には、天保十一(一八四〇)年江戸帰国から元治元(一八六四)年まで詠まれた漢詩百三十首を収めるが、このうち五十六首(他に収録されていない詩二首)がわずか五年間の福井時代に詠まれている。小楠の人生にとって、この五年間の体験がいかに大きなものであつたのかがわかる。

そこで今回は小楠が福井時代に詠んだ漢詩を取り上げ、五十才を過ぎ、家族や友人・門弟たちと離れた異郷の地で、彼が何を感じ何を思いながら活躍したのか、分析・考察してみたい。小楠は五年間、ずっと福井にいたわけではなく、弟の死・母の死などもあつて五年間で都合四回、福井と熊本の間を往復している。幸い『小楠堂詩草』の詩は作成年代順に丁寧配列されている。本稿では第一回の福井行から第四回の福井行まで、彼の行動や歴史的背景を

概観しながら、各期の代表的な詩をとりあげ、その時々々の心情や思想に迫っていききたい。

また、筆者は前々稿「横井小楠の『感懐詩』について」¹⁾で、小楠の江戸遊学から帰国後の朱子学への傾倒(第一の転機)を考察。次いで前稿「横井小楠の『沼山閑居雜詩』について」²⁾で、福井に行く直前(安政四年春)における小楠の攘夷から開国への転換と「三代の治道」への傾倒(第二の転機)を考察した。それは堯舜三代を理想の政治とし、西洋社会の政治と対峙させ、現在混乱している幕末政治変革の行動指針としようとするものであつた。この考え方が福井に行つて、具体的実践にどう反映され、どう展開していったか。この点についても考察してみたい。

一 福井藩招請まで

江戸遊学から帰つた小楠は天保十四(一八四三)年、長岡堅物・元田永孚・荻昌国・下津久也らと講学を始め、実学派を形成、熊本藩の藩政改革に乗り出した。しかし、藩内保守派の巻き返しに遇い、弘化三(一八四六)年長岡堅物の文武芸倡方解任、翌年家老職辞任に及んで挫折した。小楠はこのような状況にめげず、塾舎「小楠堂」を新築、門弟たちとの講学に励んだ。

嘉永二(一八四九)年十月には、松平春嶽の「朱学純粹の学者」を探すよう内命を受けた福井藩の三寺三作が小楠のもとを訪れ、二十日間滞在、小楠の手許から五点の著作(「感懐十首」、「恭題泰勝公和歌卷後」、「読諸葛武侯伝」、「題見聞私記後」)及び「本庄一郎宛書簡」を持ち帰つた。これが小楠が福井藩(春嶽)に知られ、注目される契機となつた。嘉永四(一八五一)年二月、上国遊歴の旅に出て、一ヶ月近く福井に滞在。福井藩儒吉田悌藏(東篁)の学舎において『大学』の会読をおこなう。参会者七十余人という盛況であつた。この時の印象を小楠は「盛大なるは福井にしく所御座無く候」と述べ、福井藩(春嶽)に大きな希望を持つと同時に、福井の人士とも交流を深め、彼らに強い印象を与えた。

帰熊後も福井藩の要請で「学校問答書」を提出(嘉永五(一八五二)年)したり、吉田悌藏・岡田準介らと文通したりなど、福井藩との関係は断続的に続いた。そして安政二(一八五五)年頃からの柳川藩(立花壱岐・池辺藤

左衛門ら)の働きかけや、安政三(一八五六)年十二月二十一日村田巳三郎(氏寿)宛の小楠の書簡を読んだ松平春嶽の決断もあり、福井藩招聘の話が持ち上がり、安政四(一八五七)年五月、命を受けた村田氏寿がその旨を伝えるため来熊した。熊本藩は招聘に難色を示したが、春嶽が直接藩主の斉護宛に依頼の手紙を書いて説得(同年十二月)するなどして、ようやく安政五(一八五八)年二月二十九日福井行きの許可が下りた。

それより先、安政五年正月、年頭にあたって小楠は門弟内藤泰吉からの詩に和し、「和内藤生元日韻(内藤生の元日の韻に和す)」と題する次のような詩を詠んでいる。

北風頑自北海吹 北風頑かたくなに北海よ自り吹き、

水氷山雪春未披 水氷 山雪 春未だ披ひらかず。

天運人事渾相同 天運人事 渾まべて相あい同おじければ、

萬物何時入熙熙 萬物 何れの時にか熙熙ききに入らん。

堯治舜化豈意廢 堯治舜化 豈に意に廢やせんや、

講明大道在此時 大道を講明するは此の時に在り。

北風が執拗に北の海から吹き寄せ、川には氷が張り山には雪が積もり、春はまだ来ない。「しかし」天運(自然のめぐりあわせ)人事もともに同じで、すべての物にはいつしかやわらぎ楽しい時がやって来るものだ。堯の政治・舜の教化をどうしてあきらめることができよう。大道(堯舜三代の道)を世に説き明かすのは今この時にあり。

本詩は内藤の句「既に久し二千年の旧国、是の命の維たれ新たなるは何れの時にか在らん」に対する回答、すなわち「いつか春がやってくるように、私たちの理想を実現できる日がやってこよう」という励ましでもあるが、現実化しつつある福井行きを目前に、今年もしかしたら、自分の長年の理想(「大道」すなわち堯舜三代の道)が名君のもとで実現できるのではないかという小楠の期待や意気込みがうかがえる。

堯舜三代の政治を目指した「治教は三代を期す」(「感懐十首」という考えは、天保十三・四年あたりから意識するようになり、安政四年春の「沼山閑居雜詩」において、西欧思想・政治に対峙するものとして小楠が明確にうちだしたものであるが(小楠の思想の特徴)、福井行の目的が「堯舜三代の道を世に解き明かす」、すなわち堯舜三代の道を具体的に実現するという

はつきりした目標をもったものであったことがわかる。

二 最初の福井行(安政五年三月〜六年一月)

「偶作」「漫興(二首)」「遊農日樓」「題畫美人」「讀二典七首(節六)」「與長谷部司計」「雪日同諸子訪井上某」「仲冬十四日秋田參政傳大夫人之命、賜衣於賤母。何幸受此寵榮。感佩之至、恭賦七絶奉謝」の計十四首。

福井へ出発 難航していた招聘交渉も、福井藩の熱心な説得に熊本藩側が折れ、ようやく福井行きの許可が下り、安政五(一八五八)年三月十二日、小楠は安場一平(安和)と河瀬典次を供に出発した。柳川からは池辺亀三郎も同行した。熊本から柳川へ行く途中、小楠は輻の中より徳富一敬を差し招き、詩が出来たと言って口吟しつつ、次の詩を彼に書き取らせた。「偶作」と題す。

奉命孤臣千里身 奉命孤臣 千里の身、

青山碧海一望春 青山碧海 一望の春。

此行唯欲盡心事 此行 唯ただ心事を尽くさんと欲す、

成否在天不在人 成否は天に在りて人に在らず。

命を奉じて孤臣(私)は千里の道を旅することになった。緑の山・紺碧の海、見渡す限りの春景色。この旅はただ日頃の志を存分に尽くすのみ。成否は天の定めること、人が与あたかることでない。

本詩は福井行きの命を受け、たった一人「孤臣」(熊本藩における自身の立場も示すか)で、かの地に乗り込み、国事に関与し、自分の日頃の志(「心事」)を思う存分發揮してみようという希望・喜び・気概を詠んだものである。「成否は天に在りて人に在らず」、すなわち「人事を尽くして天命を待つ」は「田子敏の寄せらる韻に和す」(『遺稿』八八二)の「否ひた泰た惟たれ天にして吾与からず、行蔵命有り独り之に安んずるのみ(運不運は天にあるので私はどうすることもできない、世に出る出ないは天命であるので自分は一人これに安んずるだけだ)」などと共通し、小楠の一貫した姿勢である。

福井へ到着 さて、福井に着いた小楠は大勢の藩の重役や藩士に迎えられ、四月七日、三の丸の藩校明道館側の客館に落ち着いた。福井での待遇は明道館の教官(賓師)として五十人扶持で、きわめて優遇された。小楠は着くと

早速明道館への出講、客館での会説、来訪者の応対、有力藩士への訪問など、多忙な毎日が続いた。余暇には大好きな釣りや猟にもでかけることがあったが、やはり気がかりなのは故郷熊本^{くまもと}の沼山津^{ぬまやまづ}に残してきた家族のことである。一昨年には矢島つせと再婚し、昨年には長男又男（時雄）が誕生したばかりである。福井に到着してまもなく（安政五年夏）、「漫興（二首）^⑥」と題する次のような詩を詠んでいる（第一首）。

迂闊人間不可爲 迂闊にして人間に為す可からず、
漁樵吾欲了生涯 漁樵して吾生涯を了えんと欲す。

沼山何事神飛去 沼山何事ぞ 神飛び去る、
最是梅霖水滿時 最是梅霖 水滿つるの時。

世事にうとく俗世でやっていけなくて、田舎暮らしで我が生涯を終えようと思っていた。その沼山津にどうして心が飛んでいく。特に梅雨時に川の水が一面満ちる頃には。

沼山津での梅雨時の漁を思い出したのであろう。五十歳を越えてから、思いがけなくもめぐってきた自分の運命を望郷の念に託して詠む。

藩士との会説 小楠が福井に着いてまもなく、江戸にいた春嶽は將軍後継問題・条約の違勅調印問題で井伊大老より隠居・謹慎を命ぜられ、藩主が茂昭に代わるといふ藩内の混乱があったが、小楠はその動揺を鎮めるのに力を尽くし、明道館教育にますます力を入れた。小楠がその教育で最初に力を注いだのは、従来福井藩に大きな影響を及ぼしていた水戸学の批判と排除であった。小楠が「朱学純粹の学者」として春嶽に呼ばれたのは、そのあたりの役割を期待されたことであらう。福井に着いて暫くして次のように郷里に書き送っている。「追々御咄合申候通り総て老公（注・徳川斉昭）之無理にて、国家を覆亡被成候は全く學術之曲に因り候事にて深可恐事此許にても夫のみ講習仕り候。右之通りの事に因て天下知名者水府推尊之心は次第に消亡致し氣の毒に御座候。此許之事情は定て安場より萩君御承知と奉存候。其後相替り不申候。一統人心漸々居り合候勢に御座候」（安政五年六月十八日、下津休也・荻角兵衛・元田伝之丞宛書簡、『遺稿』二二六）。六月十五日横井牛右衛門宛書簡にも同様に水戸学を批判、根本の学問に引き戻すことに力を入れ、次第にその影響を排除、藩士たちと折り合ってきた状況を述べる（『遺稿』二五八）。

熊沢蕃山『集義和書』と『書経』 やがて小楠は彼の思想に大きな影響を及ぼした熊沢蕃山の『集義和書』の会説を開始した。安政五年八月二十五日、嘉悦市太郎外三名宛書簡に次のようにある。「近来は熊沢集義和書会業相始り、毎も鷄鳴に至り論談面白事に御座候。安場君御承知之長谷部（甚平）・村田（巳三郎）尤以長進にて、流俗輩杯にくみ候心底は聊以無之中々正大なる心中に相成誠に悦申候。此節は一旦は俗論も起り候へ共右次第にて有志者之面々聊も心を動し不申、其上人情に合ひ不申事柄は一切取り除心組にて、水府流之文武節儉之弊政夫々相改候筈に申談何方も無異議事に御座候。」（『遺稿』二七三）と夜を徹しての会説の様子を述べる。

同時に小楠の頭にあつたのは、当初の目的であつた「堯舜三代の治道」を福井において実現するということであつた。源了圓氏は次のように述べている。「小楠は自己の先駆者として熊沢蕃山を考え、その著作『集義和書』を通して書経を読むという作業を、福井藩等における政治的実践の中でもつづけ、そしてそこで得たものを実践の中にフィード・バックするという作業をしながら、自己の思想を深めていったように思われる。」

「二典を読む」 源了圓氏の指摘のように、この時期（安政五年）に小楠が詠んだ詩に「二典を読む（七首 節六）」がある。二典とは『書経』の冒頭「堯典」と「舜典」のことである。「小楠堂詩草」で二つ後の詩「仲冬十四日」が十一月の作であるので、それ以前の作である。この一連の詩は「沼山閑居雜詩」（安政四年春）の内容と重なり、後の「国是三論」「沼山對話」「沼山閑話」などへとつながる『書経』における「堯舜三代の道」を手本とする小楠晩年の思想を示すものとして重要である。しかし『小楠堂詩草』では塗改が多く、後の手が入っているので扱いに注意が必要である。

（一）鳥羽獸毛渾作媒 鳥羽獸毛 渾べて媒を作し、
四時定得百工開 四時定得得て 百工開く。

庶民不識若天業 庶民識らず 若か天業、
只道帝功安在哉 只だ道う帝の功 安くに在りやと。

（二）渾將人事付皇天 渾べて人事を付て皇天に付し、
六府脩來又濬川 六府脩め來たり 又濬川す。

勿道西洋明治術 道う勿かれ西洋明治の術、
四千年古既開先 四千年の古 既に先を開けり。

(3) 典刑嚴肅象天雷 典刑嚴肅にして天雷に象るも、

欽恤好生德懋哉 欽恤好生 德懋なる故。

何事唐明說律者 何事ぞ唐・明の律を説く者、

紛紛不本五倫來 紛々 五倫に本づかずして來たる。

(4) 如聽君臣吁咈聲 聴くが如し君臣吁咈の聲、

滿庭講學見真情 滿庭の講學 真情見わる。

叩頭流血果何益 叩頭流血 果して何の益かあらん、

枉令賢材買直名 枉げて賢材をして直名を買わしむ。

(5) 明君初政總磨精 明君の初政 総べて精を磨く、

荒廢中年以後情 荒廢す中年以後の情。

何事暗明分晝夜 何事ぞ暗明 晝夜を分かつ、

看看二帝老書生 看看よ 二帝の老書生。

詩は第一首で「四季を定め百工を開いた(自然の運行に従い産業を興した) 堯帝の事績を称える。「沼山閑居雜詩」にも「民に授くるに四時を以てす」(第三首)、「治術百工攻め」(第四首)とある。第二首は舜帝の政治を例に「舜帝は」すべて人事を天の采配に任せ、六府をよく治め、また川をさらい洪水を鎮めた。西洋の政治の術は秀れていると言つてはいけない。四千年も昔に既に先例があるではないか」と西洋の政治の術と比較しながら三代の治を称賛する。第三首では堯舜時代の刑罰の仁徳ある(「欽恤好生」)のに比して、唐・明の刑罰は繁雜・五倫に基づかないと詠む。第四首は「沼山閑居雜詩」の第二首目「盛んなる哉唐虞の際、君臣道義親しみ、滿廷吁咈の聲、治化日の昇るが如し」と同様、君臣分け隔てない講習討論を詠む。第五首は堯舜の二帝が死ぬまで学問修行をしたことを述べて、民の上に立つ君主の率先しての努力と重い役割を述べる。『講義』学而之章(『遺稿』九三三)にも「堯舜も一生修業し玉ひしなり」とある。

小楠は『書経』の「二典」の内容を読み解きながら、福井藩で自身の為すべき事柄を確認し、堯舜三代の治を実行できる環境(君臣関係)がここ福井にあるという実感をもって本詩を詠んだものと思われる。ここで注目したいのは第二首第二句「六府脩め來たり又濬川す」の中の「六府」という言葉である。この言葉は「沼山閑居雜詩」(安政四年春)には見えず、本詩で初めて用いられた。「六府」とは民を養うに必要な財貨の基本、水・火・金・

木・土・穀の六つの要素のことである。

「六府」について、「国是三論」(万延元年。『遺稿』三八)の富国論では、「通商交易の事は近年外国より申立てたる故俗人は是より始りたる如く心得れども決して左にあらざ。……政事といへるも別事ならず民を養うが本体にして、六府を修め三事を治る事も皆交易に外ならず。先ず水・火・金・木・土・穀といへば山・川・海に地力・人力を加へ民用を利し人生を厚ふする自然の条理にして、堯舜の天下を治るも此外に出でず」と述べている。「六府を修め三事(正徳・利用・厚生)を治る」こと、すなわち「交易」によって「民を養う」、それが「政事」の本体であり、これは外国で始まったことではなく、堯舜時代に先例があると言う。つまり「仁政」の根本は「交易」によって民を富ますことだと言っている。当初、小楠は緊縮財政政策(節儉)をとっていたが、それでは民が豊かにならないと気づき、産業や交易による積極財政政策を考えるようになったのである。

「交易」という考えは安政四年の「沼山閑居雜詩」にも見られたが(第四首「百貨四海に通ず」、まだ抽象的であった。「国是三論」のように「六府(財貨)」と「交易」と「政事」を結びつけて『書経』の堯舜三代の政治を読み解いたのは、源了圓氏が言われるように小楠が福井藩において『書経』を必死に読んで、それを福井藩での政治実践にフィードバックするという作業から生れたものであるのは明らかであろう。

ただし、「国是三論」(万延元年)に先んじて、安政五年「二典を読む」の段階で小楠が先述のような考え方を持っていたかどうかはわからない。なぜなら「二典を読む」に見える「六府脩來又濬川」は、『小楠堂詩草』ではもとの「和得百工又濬川」を塗改したものであるからである。すなわち「六府」は小楠が後になってから(元治の頃か)書き換えた言葉である。これを逆に考えると、安政五年福井に着いた当初、小楠はまだ「国是三論」のような具体的・体系的な考えには至っておらず、政治実践とさらなる『書経』の熟読とから「国是三論」のように具体化・体系化していったと考えるのが妥当だと思われる。

「六府」について小楠はさらに「沼山対話」(元治元年。『遺稿』九〇三)において、「全体聖人の作用利世安民の事業二典三謨にて粗見得可致候。阜陶謨に六府三事 允 父と有之、六府は水・火・金・木・土・穀の六物を指

候て民生日用の財用不可欠者なり。聖人上に在て民生日用の世話をいたされ右の六府を父めて其用を尽し、物産を仕立て器用を造作し許大の生道を建立せられたり。是実に聖人代天の大作用なるに、朱子之を知らずして五行の氣と穀とを合して六府とすと説けるは大なる誤にて候」と述べている。朱子学で木・火・土・金・水を陰陽五行の氣と扱うのに対し、小楠は『書経』を根拠に水・火・金・木・土・穀を共に「民生日用」に不可欠の財として解釈し、聖人は天に代わり「其用を尽くし、物産を仕立て器用を造作し許大の生道〔経世安民の事業〕」を建立したとする。

さらに「沼山閑話」（慶応元年。「遺稿」九二二）でも「水・火・金・木・土・穀各其功用を尽して天地の土漏るること無し。是現在此天帝を敬し現在此天工を亮る経綸の大なる如之」であり、「堯舜をして当世を経綸し天工を広め玉ふこと西洋の及ぶ可に非ず。是れ堯舜三代の畏天経国と宋儒の性命道德とは意味自ら別なる所あるに似たり」と、水・火・金・木・土・穀のそれぞれの功用を尽くすことが現在この天帝を敬し、現在この天工を亮ける経綸の大なるものだと述べ、また「三代治道の格物と宋儒の格物」とは意義が全く違ふと小楠独自の見解を述べるにいたった。

ここから西洋と比較しながら、『書経』を現在に活かして理解しようとし、その結果朱子学の範囲を超えざるをえなかった、あるいは朱子学では対応できず『書経』に遡らざるを得なかった小楠の思想の変遷がうかがわれる。

藩士との交際 小楠の福井でのもう一つの仕事は、藩政改革すなわち「三代の治道」を実行できる人材を探し、彼らと親密な人間関係を築くことであつた。特に、「民を愛し食衣を豊かにし」「国を富まし」（『沼山閑居雜詩』）、「民を富し、産を生ずるによつて国を富し士を富す」（『国是三論』）経済政策に通じた人物は欠かせない。その点で勘定奉行（司計）の長谷部甚平（忍連、号は脩溪）や三岡八郎（当時石五郎、のちの由利公正）らとの親密な交際は大きな意味を持っていた。小楠が福井で成し遂げた大きな実績、藩財政の建て直しは彼らに負うところが大きい。特に客館の向かいに住む長谷部との付き合いには大変気を配っている。

與長谷部司計（長谷部司計に与う）

何其道誼得情深 何ぞ其れ道誼あり 情深きを得たる、

日不對顔即惱心 日々対顔せざれば 即ち心を悩ます。

半夜鷄聲夢正覺 半夜鷄聲 夢正に覺むれば、

思君呼酒坐閑吟 君を思い酒を呼び 坐に閑吟す。

なんと道誼をもとに深い友情を結ぶことになった。毎日尊顔を拝しない心が晴れない。夜半鷄の鳴き声に夢を破られて目を覚ますと、しきりに君のことが偲ばれ、酒を命じてそぞろに詩を吟じています。

このような漢詩のやり取りは二人の信頼関係をさらに深めたことであろう。その他、この時期詠まれたものに、藩内保守派の家老伯氏の別荘に招かれ、絶景を詠んだ詩（『農日樓に遊ぶ』）、雪の日に井上某（井上松濤、字は公道）を訪問して初めて体験した雪国の情緒を詠んだ詩（『雪日諸子と共に井上某を訪ぬ』）がある。

弟の死と帰国 八月十七日、実弟の永嶺仁十郎が急死し（享年四十四才）、小楠は一旦熊本に帰ることになった。十二月十五日、福井を發つて帰藩。竹崎律次郎・河瀬典次のほか、福井藩士三岡八郎・柳原幸八・平瀬儀作をともし、翌安政六（一八五九）年一月三日熊本に到着した。

帰るに当たって、十一月、熊本藩主細川斉護の娘で、嘉永二年春嶽に嫁し、小楠の福井招聘に際しても実家との間に立って尽力してくれた勇姫から母親に紋服を拝受した。小楠の母親思いと福井側の小楠に対する気遣いがわかる。「仲冬十四日、秋田参政大夫人の命を伝え衣を賤母に賜う。何の幸いか此の寵榮を受く。感佩の至りにして恭しく七絶を賦し奉謝す」と題する詩がある。

表黒裡紅九曜鮮 表は黒 裡は紅にて 九曜鮮やかなり、

恩深阿母壽如仙 恩深きの阿母 寿は仙の如し。

家郷千里亂山雪 家郷千里 乱山の雪、

何日捧持舞膝前 何れの日か捧げ持ちて膝前に舞わん。

○秋田参政側用人秋田彈正。○九曜―九つの星。細川家の定紋。春嶽夫人より黒縮緬紅裏九曜の紋服を老母に、又春岳より奉書袖葵崩しの紋服を養母（兄持明の妻きよ）に下賜された。

〔拝領の〕御紋服の表は黒縮緬、裏は紅絹で、九曜の紋が鮮やかに染め出されている。かくなる大恩をこうむり、母もきつと仙人の如く長生きすることでありましょう。郷里は千里のかなた、山々の雪で遠く隔てられています。一刻も早くこの賜物を捧げ持ち老母の膝下で喜びを共にしたいものです。

三 二回目の福井行（安政六年四月〜十二月）

「無題」「貝津山中」「踰木嶺」「偶作（二首）」「和孝顯禪師見寄韻」「與長谷部司計」「寓言五首」「病中偶作二首」「仲秋月夕牧野氏芙蓉菴集即事二首」「和長谷部司計秋日書懷韻」「和笠原医伯見寄韻」「遊山本氏別莊與諸同好同賦 莊名丹巖洞」「余欲和笠子馬韻。井公道助成第二句。初而爲全詩。即錄以贈之」「初冬本多執政宅集笠子馬詩先成和其韻」の計二十一首。

福井へ 熊本に一時帰省していた小楠は、安政六（一八五九）年四月下旬、再び福井に向けて出立し、五月二十日福井に到着した。福井に行く道中の詩に次のようにある。

踰木嶺（木嶺を踰ゆ）

身世茫茫渾耐驚 身世茫茫 渾べて驚くに耐え、

三 踏木嶺越前行 三たび木嶺を踰ゆ 越前行。

極知人事不須必 極めて知る人事の必を須いざるを、

流水行雲寄此生 流水行雲に此の生を寄さん。

○木嶺―木芽峠・木ノ芽峠。敦賀市と今庄（南越前町）との境にある峠。自分の一生は茫茫として定めなくすべて驚くようなことばかり、はからずも三度も木の芽峠を越えて越前に行くことになった。人事には必然というものがないことがよくわかる。ならば流れる水・飛び行く雲にこの身を任せるとうしようか。

木の芽峠は古来北陸道の要衝で、紫式部・源義経・道元・新田義貞・信長・秀吉・芭蕉らも通った歴史的な峠である。小楠は峠を越えながら、自分の数奇な人生を振り返り、これから帰任していく福井藩、ひいては日本の行く末を思い、その感慨を詠んだものであろう。また、小楠の歴史著作『南朝史稿』の最後の部分に、木の芽峠が出てくる。「(新田)義貞塩津に至る。足利高経大兵を以て路を塞ぐ。転じて木目嶺由りするに、会大いに雪ふり人馬凍死す」(原漢文。『遺稿』七六九)。この事件も小楠の脳裏に思い起こされたかもしれない。

福井での生活・藩士たちとの交流・物産総会所の開設 小楠は福井に着くと、暫くして病気にかかり、一ヶ月ほど病に臥した。「長谷部司計に与う」

は同病（痰咳）にかかった長谷部に送ったもの、「病中偶作二首」は病中に望郷の念を詠み、「阿母七旬杖つきて行を作し、秋風吹き起こす倚門の情」と、杖をつきながら門に寄りかかり自分の帰りを待っている七十歳の母を心配する。秋（七月）になると福井ではコレラが大流行し、大騒ぎになった。「笠原医伯の寄せらる韻に和す」と次に挙げる「余笠子馬の韻に和せんと欲す。井公道助けて第二句を成し、初めて全詩と爲る。即ち録して以て之に贈る」はこの時の騒ぎを詠んだものである。

秋光月夕總休遊 秋光月夕 総べて遊ぶを休め、

印度癘神如水流 印度の癘神 水の如く流る。

咄咄不須祭狼社 咄咄 狼社を祭るを須いず、

滿城生命頼斯叟 滿城の生命 斯の叟に頼る。

本州日社。俗謂之狼神。有折則神必令狼除邪。疫癘盛行滿城洵祈神求救。可謂愚俗之甚。（本州の日社、俗に之を狼神と謂う。折有れば則ち神必ず狼をして邪を除かしむ。疫癘滿城に盛行すること洵洵なれば神に祈り救いを求む。愚俗の甚しきものと謂う可し）

○笠子馬―種痘医学の笠原白翁。○井公道―井上松濤。○狼社―狼神社。○本州日社―福井県今立郡池田町常安にある日野宮神社のこと。日宮とも称し、俗に狼神社ともいう。○狼神―狼は山の神の使いとして、疫病神などを退けると信じられた。

外出して秋の風景や月を愛でることをやめた。インドの流行病があちこちにはやっっている。なんと狼社を祭るなんて、そんなこと必要ありませんよ。町中の人々の命はこの叟（笠原白翁）の手にかかっているのですから。

印度癘神とは安政六年七月から八月にかけて福井で大流行した「ころり」「暴瀉病」と呼ばれたコレラのことである。祈祷に救いを求めるのを自注で「愚俗の甚だしきもの」と言い、初めて福井に種痘をもたらした藩医笠原白翁を信頼せよと詠む。迷信を排除し西洋医学を推奨するのは小楠らしい。

小楠は福井の有名な人士との交際をますます深めている。「孝顯禪師の寄せらる韻に和す」は小楠の福井藩改革を側面から援助してくれた孝顯寺（現福井市足羽一丁目）の住職 鴻雪爪の詩に和韻したもの、「仲秋の月夕牧野氏芙蓉菴にて集う即事二首」は藩の大番頭牧野幹の別荘「芙蓉菴」で諸子と月を愛でて詠んだもの。「山本氏の別荘に遊び諸同好と同一賦す 莊の名

は丹巖洞なり」は、福井藩の改革グループや志士たちが密議の場としてしばしば用いた藩医山本瑞菴の別荘「丹巖洞」にて詠んだものである。次の「初冬本多執政宅にて集い笠子馬の詩先に成り其の韻に和す」は、家老本多修理宅（大名町〔現福井市大手町三丁目〕にあった）での熱心な講学の様子を詠む。

水聲雨聲天未晴 水声雨声 天未だ晴れず、

満堂人映玉杯明 満堂の人 玉杯に映えて明らかなり。

新聞奇事動開口 新たに奇事を聞き 動もすれば口を開き、

説盡近來魯與英 説き尽くす近來の魯と英と。

水音や雨音がして空はまだ晴れないが、部屋一杯の人々の顔は玉の杯に明るく照り映えている。新たに珍しい出来事を聞くとそのたびに口を開き、最近のロシアや英国の動向をとことんまで語り尽くしている。

小楠は以前江戸から熊本に帰って長岡堅物らと講学に励み、藩政改革に乗り出したが（実学派）、藩内保守派から攻撃され、挫折させられた。それにひきかえ福井藩では家老を筆頭に藩ぐるみ、皆でロシア・英国など外国の情報を持ち寄り、身分を越え、目を輝かせ、口角泡を飛ばして講習討論している。小楠は両藩の大きな落差を感じながら、福井に来てよかつたという思いをかみしめたに違いない。

この頃小楠は三岡八郎・長谷部甚平らとともに藩政改革（富国策）に本格的に乗り出し、十月には藩営交易の拠点である物産総会所を設立、殖産興業政策と長崎・横浜における海外貿易をおこない、これがやがて莫大な利益を上げて藩の財政をうるおわせ、小楠の福井藩における改革の大きな成果として評価されている。

「偶作（二首）」と「寓言（五首）」この時期の重要な詩に「偶作（二首）」と「寓言（五首）」がある。『小楠堂詩草』の二作の間にある「長谷部司計に与う」が安政六年七月の作なので、この前後に詠まれたものであろう。二作とも心のあり方や天を詠む。小楠晩年の経世論（「沼山閑話」「沼山対話」）につながる思想の特徴をよく表した詩であり、多くの小楠研究者が言及する。ここで詳しく触れる余裕はないが、若干のことだけ指摘しておきたい。

偶作（二首）

（一）帝生萬物靈 帝 万物の靈を生み、

使之亮天功 之をして天功を亮けしむ。

所以志趣大

志趣大にして、

神飛六合中

神は六合の中を飛ぶ所以なり。

○万物靈―すべてのものの中で最も靈妙なもの。『書経』泰誓上に「惟れ天地は万物の父母にして、惟れ人は万物の靈なり」とある。○天功―自然のたくみ。天帝の事業。天工。『書経』舜典に「帝曰、咨、汝二十と有二人、欽まん哉。惟れ時れ天功を亮けよ」とある。○六合―天地と四方。

天下。『呂覽』審分に「神、六合に通ず」とある。小楠が揮毫した書に「心を六合の中に立て。天地の正理を明らかにす」（『小楠先生遺墨集』六、昭和十四年）の語がある。

帝は万物の靈を生みたまい、これら（人間）をして天の事業（自然の巧みなはたらき）を助けさせられた。志を大きくして、精神を天地四方に飛ばす所以である。

小楠は早く時習館時代から「立志」（『寓館雜志』）を盛んに強調し、「心の官は只だ是れ思うなり、思えば即ち真理生ず。或いは一身の上に在り、又天下の平に入る」（『感懷十首』）と詠んでいるが、本詩はこれらの思想と後の「沼山閑話」（元治元年）「沼山対話」（慶応元年）をつなぐものとして、重要であろう。

まず前二句は、「沼山閑話」（『遺稿』九二二）の「堯舜三代の心を用ゆるを見るに其天を畏るる事現在天帝の上に在せる如く、目に視耳に聞く動揺周旋総て天帝の命を受る如く自然に敬畏なり。別に敬と云ふて此心を持するに非ず。故に其物に及ぶも現在天帝の命を受けて天工を広むるの心得にて山川・草木・鳥獸・貨物に至るまで格物の用を尽して、地を開き野を經し厚生利用至らざる事なし。水・火・木・金・土・穀各其功用を尽して天地の土漏るること無し。是現在此天帝を敬し現在此天工を亮る経綸の大なる如之」とつながる。これについて源了圓氏は次のように述べる。「小楠はしかし宋学における天人の相関が『性命道德』という次元にとどまっていることに満足できない。彼において天は『天帝』として人格的超越者であるが、しかもこの天に對して人は『現在天帝の上に在す』ように天を畏れ、『現在天工を広め』『亮け』る心得で『格物』の用をつくし、地上のあらゆる物のもっている可能性を十分に發揮させて利用厚生の実をあげる。これが彼の考える天と人とのあ

るべき交わり方である。それは抽象的な関係でなく、現在そこにいて大きなみわざを發揮する天と、それに対し畏敬の念をもち、『格物』によってそのみわざの実現を扶ける人との生きた関係である。」

また後二句は「沼山対話」(『遺稿』八九八)の「凡そ人心の知覚は誠に限なきものにして、此の知覚をしひろむれば天下一物として我心に遺す所はなきものに候。心の知覚は即思にあることにて思ふて其筋を会得いたし候えば天下の物理皆我物に相成申ことに候」と学問の眼目は「思」であることを述べ、さらに「学問の規模は宇宙皆我分内と致すべく候。凡我心の理は六合に亘りて通ぜざるごとくなく、我が惻怛の誠は宇宙間のこと皆是にひびかざるはなき者に候。世の学者大抵一偏に拘執せられて我れと我心を狭小にするもの多く候」と述べるのにつながる。小楠は人心の理(知覚)は無限であり、これを押し広めることによつて、天下の事物はすべて自分の心に包摂されると考え、だから「心虚なれば即ち天を見 天理萬物相和す」(『寓言五首』)境地に達すると考へる。

(2) 道既無形骸 道 既に形体無ければ、

心何有拘泥 心 何ぞ拘泥有らんや。

達人能明了 達人能く明らかにし了えて、

渾順天地勢 渾べて天地の勢に順う。

○形骸—身体。なりかたち。精神に対していう語。

道が形のないものとする、心はどうしてこだわりなど必要があるのか。達人はよくそれを理解して、何事にも天地自然の勢いに順応している。

すなわち道には形がなく、性のみある。その性は天の命じたものだから、その性にしたがうことが道である。だから達人はこだわりのない心でもって天地自然の勢いに順応するのであると述べる。小楠は後に「道は天地自然の道にて乃我胸臆中に見え候処の仁の一字にて候。人々此の仁の一字に気を付け候へば乃ち自然の道にて候」(『沼山対話』、『遺稿』九一〇)と述べ、「仁」の心を押し及ぼすことこそ天地自然の道だと述べる。

第一句の「道 既に形体無ければ」は朱子の「邵堯夫(注…邵康節(邵雍)の字)説く、性は道の形体、心は性の郭郭と。此の説甚だ好し。蓋し道に形体無く、只性のみ便ち是れ道の形体なり。然れども若し箇の心無くば、却つて性を將つて甚だしき処に在らしむ。須く是れ箇の心を有らしめば、

便ち這の性を收拾し得て、発用出だし来たる」(『朱子語類』卷四)を踏まえたものである。小楠が「偶作(二首)」及び次の「寓言(五首)」などで心のありかた、すなわち「心法」の問題をクローズアップするようになった原因はよくわからないが、邵康節の影響もあるのではないかと思う。

寓言(五首) * () 内は『詩草』の塗改前。□は不明。

(1) 智唯在撰善 智は唯だ善を撰ぶに在り、

撰善即執中 善を撰ぶは即ち中を執るなり。

何以執其中 何を以てか其の中を執らん、

方寸一字公 方寸一字の公のみ。

○『書経』大禹謨に「人心惟危、道心惟微なり。惟れ精惟れ一、允に厥中を執れ」とある。

(2) 衆言恐正議(俗論恐清議) 衆言は正議を恐れ、

正議憎衆言(清議憎俗論) 正議は衆言を憎む。

二者名利耳(要之名與利) 二者名利のみ、

別有天理存(別在道誼存) 別に天理の存する有り。

○「小楠先生遺墨集」一一では「衆論恐清議、清議憎衆論、二者名利耳、別在天理存」に作る。

(3) 既非衆與正(既非正俗言) 既に衆と正とを非とすれば、

天理何處求(道誼何處存) 天理 何れの処にか求む。

一生和同意(更恐子莫中) 一たび和同意を生ずれば、

忽乘子莫舟(併為三害論) 忽ち子莫の舟に乗ぜん。

○子莫—楊朱と墨翟の中間を取る中道主義の人。朱子『孟子集註』では子莫の中を「一定の中」、孟子の中を「時中(時に随い変に処してその宜しきにかなうこと)」と注釈する。衆言と正議が間違いだからといって、中を取る(子莫)ことはまた別の間違いを犯すだけのことである。『小楠堂詩草』の塗改前の原文「更に恐る子莫の中、併せて三害の論と為るを」は、それでは衆言と正議と併せて三つの害論となってしまうと言う。

(4) 是彼又非此 彼を是とし又此を非とすれば、

是非一方偏 是非一方に偏す。

姑置是非心 姑く是非の心を置け、

心虚即見天 心虚なれば即ち天を見る。

(5) 心虚即見天(紛々閑是非) 心虚なれば即ち天を見る、

天理萬物和(争来關何事) 天理 万物和す。

紛々閑是非(一〇〇〇〇〇〇〇) 紛々たる閑是非、

一笑付逝波(〇〇〇〇〇〇〇) 一笑 逝波に付さん。

○『小楠先生遺墨集』一七に「虚心見理(心を虚しくすれば理を見る)」の語がある。

智のはたらきはもつぱら善を選ぶことにあり、善を選ぶには中庸を守らなくてはならない。何によって中庸を守るか。それは心に「公」の一字を刻むことである。

衆言は正議を恐れ、正議は衆言を憎む。しかし両者は名利を追求する点では同じであり、「この両者とは」別に天理が存在するのである。

衆言と正議を非とするのなら、天理は何処に求めたらよいか。「だからといって」一たび和合(まぜあわせる)の気持ちを生じてしまうと、たちまち子莫と同じ舟(中を取る)に乗ることになるだろう。

あちらを是としましたこちらを非とする。万事に是非を決めること自体一方に偏った判断である。しばらくそのような是非を云々する心を捨てよ。そうして心を虚しく「公平無私に」すれば(はじめて)天(理)が見えてくる。心を虚しくすれば天が見えてくる。天理のもとで万物は調和している。あれやこれや無用の(どうでもよい)是非の論など笑って逝く波に託して流せばよい。

小楠が心のあり方を述べた詩である。「公」「天」「天理」が強調される。

本詩を揮毫した書が幾つか伝わる。『小楠先生遺墨集』一二の解説で「小楠先生会心の作と伝えられている」と述べる。一つ一つの詩について述べる余裕はないが、本詩の詠まれた背景について松浦玲氏は次のように述べる。

「長谷部に『丹釀』の詩を送ったすぐあとだから安政六年六月末か七月かと思われるころ、小楠はまた『寓言』と題した六首の詩をつくっている。その一首に、一中略(塗改前の(2)の詩及びその書き下し文)——というのがあって、改作の時期は不明だが、俗論はあとで『衆言』に、清議は『正議』に、また道誼は『天理』に改められている。この『寓言』の詩は、全体として改削がいちじるしく、改められたあとは『天理』の強調が目立つという点でも注目すべきものだが、それは別としても、小楠がこういう詩をつくっている

のは、三岡が第一回長崎出張から帰って、第二回出発までの間(安政六年五月(八月)に、藩の方針をめぐって相当激しい議論が闘わされたことを示すのではあるまいか。)

これを裏づけるかのように、安政六年七月二日矢島恕介宛書簡(『遺稿』二八六)に「正俗共に一偏に落入互に相争世界にて中々中正之條理分り可申様無之、二千歳之氣習無致方次第に御座候。乍然西洋面々追々入込候へば不遠人情世態漸々分り可申、是のみ楽可申候外には誠に所分無御座、困入申候。尤も今日に至り内は水府之乱、外は外国に被押懸、朝義誠に大困窮に候へば自然と他人の了簡を聞度心得には相成居可申、…」とあり、また「北越土産」(安政六年、元田記録。『遺稿』九一六)にも「君子俗流の弁別一切致し不申、双方共に話合にて其人々々其筋々々に其情を尽し申候由。俗流よりは初めの程は追々落書杯も致し候由に御座候へ共聊片乗致し不申、公平に其話合を聴き候故、後には人心一致いたし候由に御座候」と藩内の対立(進歩派・保守派)の仲裁に腐心したことが記されている。

是だの非だのといって自説に固執し相手を決めつける典型的な例は党派(朋党)の争いである。小楠は時習館時代以来、朋党の争いに警鐘を鳴らしているが、「寓言五首」はそういう時事に即して、つまらぬ是非(閑是非)を争う対立に無駄なエネルギーを使う愚かさを戒め詠んだものだと思われる。小楠は文久三年四月にも「朋党の病を建言す」と題する建白書を藩主松平春嶽に提出し、「朋党は私情に起り所謂閑是非に争ふ事に候。執政諸有司に先立玉ひ公共の明にて事々被聞召、條理に随ひ御決断被遊候へば、自然に閑是非は消へ申候。是朋党無之所以に御座候」(『遺稿』八七七)と「公共の明」「條理」によって「閑是非」は解消するとする。

『小楠堂詩草』の改作(清議↓正議。俗論↓衆言。道誼↓天理)は後の思想により、一般化して述べようとしたものであろう。

小楠は安政六年十二月五日、母かず重病の知らせにより熊本に帰郷した。同十八日に到着したが、母はすでに十一月二十九日死去していた。享年七十二歳。

四 三回目の福井行（万延元年三月～文久元年十月）

「梁瀬題中川瀬平墓」「踰樞峰用昨年木峯詩韻」「題清風軒」「題蘭竹」「題秋江晚釣圖」「泰安寺」「喜雨賦與長脩谿」「偶成」「病中次舊詩之韻寄芙蓉菴集賞月諸同好」「送江口純帰國」「裁錦樓即事」「奉和春嶽老公述懷韻」「過河中島」「發福城。南窓・脩溪・南陽諸子送到府中。重次南陽韻爲別」の計十四首。

福井へ 翌万延元（一八六〇）年二月か三月に三度目の福井藩招聘により、福井へ赴いた。前回の福井行では西近江街道を通ったが、今回は琵琶湖の東側の北国街道（木之本・余呉・栃の木峠）を經由したので、街道の近くの賤ヶ岳の古戦場を訪ねた。

梁瀬題中川瀬平墓（梁瀬にて中川瀬平の墓に題す）

三劍七槍盡錦衣 三劍七槍 尽く錦衣、

豊家覇業在斯時 豊家の覇業 斯の時に在り。

嘆君不受公侯拜 嘆く君 公侯の拜を受けず、

留得空山一片碑 空山に一片の碑を留め得たるを。

○梁瀬―柳ヶ瀬。現滋賀県伊香郡余呉町。北国街道の要所で、賤ヶ岳の戦で柴田勝家が陣を置いた所。○中川瀬平―中川清秀、通称瀬兵衛。羽柴秀吉の家臣。大岩山で佐久間盛政に攻められ戦死、山上に葬られる。

○三劍―賤ヶ岳の戦いでは石川兵助、桜井佐吉、伊木半七が功を立て「三振太刀」と呼ばれた。○七槍―加藤清正ら賤ヶ岳七本槍。

賤ヶ岳の戦いで功を立てた三劍七槍の連中は皆出世して、豊臣家の覇業はまさしくこの戦いにより成し遂げられた。君だけは大名に封じられず「戦死して」、こんな人気の無い山に一片の墓碑だけ残しているのはいかにもいたましいではないか。

歴史に埋もれた人物に思いを致すのは小楠らしい。また、昨年と同じ木の芽峠を越えるに際し、同じく七絶の同韻で峠越えのさまを詠んだ。「樞峰を踰えるに昨年の木峯の詩韻を用う」があり、一昨年・昨年に弟と母を亡くし、その心労及び隔世の感を詠んでいる。

福井での生活と『国是三論』の執筆 福井に着いてまもなく、四月二十二

日より福井藩大番頭牧野幹・藩医笠原白翁らと三国湊に遊んでいる。

題清風軒（清風軒に題す）

水明青松日傾杯 水明青松 日々杯を傾け、

更上清風水上樓 更に上る 清風水上の樓。

鯤躍鵬飛三萬里 鯤躍り鵬飛ぶこと 三万里、

盡將風色集三州 風色を尽くし將って三州に集めたり。

水明・青松・清風三樓均臨河港。爲三国之佳勝。（水明・青松・清風の三樓は均しく河港に臨む。三国の佳勝なり）

○清風軒―清風亭。三国の宿浦（現坂井市三国町宿）にあった料亭。清風清右門が主であった。（三国今昔懇話会篇『みくに今昔あれこれ』その七、平成十四年、六八頁）

水明楼・青松楼にて日がな杯を傾け、更に「眺望を得ようと」河のほとりの清風楼に上ってみると、鯤が躍り鵬が飛び、三万里も見渡せる広大なながめ。あらゆるすばらしい景色がここ三国に集まっている。

日本海を望む壮大な風景を詠む。小楠の鴻雪爪への書簡（『遺稿』六一九）に、「去月廿二日より牧水鑑、笠白翁之諸同好と三国に遊び、一日宿浦の清風楼に上り潮浴いたし、例の三杯を命じ午睡、初て覚れば夕陽水に映じ景色殊によりしく候へ共何ぞ咄しもなく帰らんといたし候処に不斗水鑑蘭を画し白翁竹を添、何とやらん興を催し又々酒を命じ夜分に至り帰り申候。（中略）五月十二日 雪爪禅師玉机下 小楠拜」とある。この書簡は『遺稿』では「年代不明の分」に収録されるが、本詩及び次詩（『蘭竹に題す』）の『小楠堂詩草』における配列からして、万延元年五月十二日に書かれたもの間違いない。「泰安寺」は福井藩松平家の菩提寺大安禅寺を訪れて詠んだ詩である。七月下旬には、瘧（おこり病）を再発、九月初めに療治している。この時期（八月）の作に「病中に旧詩の韻に次し、芙蓉庵に集い月を賞でし諸同好に寄す」があり、病中昨秋の月見の集いを懐かしみながら、望郷の念を詠む。

十月には藩政の基本政策について、藩首脳との討論をもとに『国是三論』を執筆、「富国論」「強兵論」「士道」に分けて、福井藩の国是を定めた。それまでの『書経』に示される「三代の治道」を理想とし、交易によって民を豊かにする小楠の政治思想を具体的に集大成したものであって、堯舜三代や

天理・天命が強調されている。万延元年十月二十五日萩角兵衛（昌国）宛書簡に「政治之筋は三箇条之国是相立、三冊之著書出来いたし、是は極内々不遠さし出可申候、御他見は一切御断仕候」（『遺稿』三三〇）。また、文久元年正月四日萩角兵衛・元田伝之丞宛書簡に「扱又国是三論出来、一は富国一は強兵一は士道、此三論を以て一国を経綸する土台に立、其根本は堯舜精一之心術を磨き聊の私心も無之修養第一にて決して秦漢以後之私心に落さず、（注は略）日夜講明此事に御座候」とある。（『遺稿』三四八）

文久元年三月、江戸へ出て松平春嶽と初めて面会 翌文久元（一八六一）年三月二十四日、小楠は松平春嶽の招きにより、江戸に出て春嶽・茂昭の諮問に答えた。それに先立ち、前年九月か十月より福井に来ていた門弟の江口純三郎（高廉）を二月に熊本に帰している。

送江口純三郎（江口純の国に帰るを送る）

明朝遊子踏春行 明朝遊子 春を踏みて行く、

此夜陽關一曲情 此の夜 陽關一曲の情。

歸向家人好傳語 歸りて家人に向かいて好く伝語せよ、

無端身在燕都城 端無くも身は燕の都城に在らんと。

明朝君は旅人となって春の野を行くであろうから、今晚はせめても陽關の曲を唱って別れの情を尽くそう。熊本に帰ったなら家の者に怒りに伝えてくれないか、私ははしなくも江戸に身を置くことになったと。

三月二十四日、江戸へと旅立つ前日の夕べには、福井藩の人達が小楠のために川端大夫（福井藩家老松平主馬）の足羽川沿いの別邸（下屋敷）裁錦楼で送別の宴を開いてくれた。次の詩はその席で詠んだ「裁錦楼即事 川端大夫の別業は羽川の濱に在り」と題する詩である。

三逢白雪一逢春 三たび白雪に逢い 一たび春に逢う、

春色無涯羽水濱 春色涯無し 羽水の濱。

痛飲狂歌君止笑 痛飲狂歌するも君笑うを止めよ、

明朝東海道行人 明朝東海 道行く人なれば。

○三逢白雪一逢春―前二回は弟と母の死により十二月に熊本に帰郷、冬か

ら春にかけて福井に滞在したのは今回初めてである。

福井に来て三度冬を迎え、一度春を迎えた。足羽川の岸边は正に春色。大いに飲み大声で歌っても、君笑わないでくれ。明日の朝は東海の旅に出る

身なのだから。

福井を発った小楠は萩原金兵衛を随えて道を東海道に取り、途中名古屋の横井家を訪ね、四月中旬江戸に着いて、初めて松平春嶽と対面した。せっかく小楠を福井に招聘したのに、春嶽が隠居させられたりなどして、これまで会えなかったのである。待ちに待った対面がやっと実現した。この時の感動を二人は互いに漢詩で詠み交わしている。春嶽の詩は次のようである。

雲霧塞心經幾年 雲霧心を塞ぎて幾年か経たる、

一朝快靄見青天 一朝快かに霽れて青天を見る。

虞廷當日無爲化 虞廷当日無爲の化も、

只在平生任自然 只在平生自然に任ずるに在り。

○無爲化―無爲而化。聖人の政治は、何事もしないで自然に天下が治まる。『論語』衛霊公に「子曰く、無爲にして治まる者は其れ舜なるか。其れ何をか為さんや。己を恭しくして正しく南面するのみ」とある。

幾年も雲や霧が心をおおっていたが、あなたに会えて青空を見る思い。虞廷（舜朝）の無爲の政治とは、ただ自然に任ずることにあつたのだね。

春嶽は小楠の話聞き、愁眉を開かれた感激を率直に詠んでいる。これに小楠は次のように和している。

奉和春嶽老公述懷韻（春嶽老公の述懷の韻に奉り和す）

斯道在懷三十年 斯の道 懐に在ること三十年、

向公一日始談天 公に向って一日始めて天を談ず。

天行如此公看取 天行此の如きを公看取す、

雨雪風雷發自然 雨雪風雷 自然に発す。

この道（堯舜三代の道）を三十年の長い間、心に秘めてきたが、ようやく春嶽公に天について語ることができました。公はさすがに天の運行が雨雪風雷のように自然に発生する事をお見通しです。

小楠はここぞとばかり日頃の信念を春嶽に説いたのであろう。以前から「堯舜の道」に深い関心を示していた春嶽も呼応。そして「無爲」にして「自然」に任ず、すなわち堯舜のような王道政治を目指すことを両者は確認したのである。文久元年四月十九日横井牛右衛門宛書簡（『遺稿』三五七頁）に「中将様（注・春嶽）へは日夜罷出様々御咄合の中尤も學術之要領至極に御了解被成、御父子様並に執政御一座の御咄合も既に及四度、毎に九ツ

頃より暮に入り父子君臣誠に家人寄合の如くに有之面白き成りに御座候」とあり、春嶽と藩主茂昭の優待ぶりを記している。

江戸滞在中の小楠は、幕臣の大久保忠寛や勝海舟と知り合いになったが、四ヶ月ほど江戸に滞在した後、休暇をもらい、一旦福井に寄つてから熊本に帰ることになった。文久元年八月十七日勝海舟宛書簡〔遺稿〕三七一に「出立前余日無御座候内兩三日外邪にて引入候て殊之外多用無寸暇罷成、何分御暇乞に参殿出来兼甚以御無礼に奉存候へ共御断申上候。…尚々此節は一ト先福井表に参り、用事の仕舞候へば肥後に帰郷仕候」とある。江戸を發つたのは八月二十日、この日たまたま熊本から江戸に出つていた城野静軒（名は充通）が小楠を見送つたことが日記『静軒日録』に書かれている。

江戸より福井へ 小楠は九月初旬に福井に着いたが、江戸から福井へは文久元年七月二日宿許宛書簡に「此節は北陸道を通行仕筈にて名のみ聞え（しカ）親不知子不知杯の名所をも見、信州・越後・越中・加賀等の国々九州者のいまだ見不申所々見物仕候」（『遺稿』三六七）とあるように、道を北陸道に取り、信濃・越後・越中・加賀を経て、その途中親知らず子知らずの難所を見物したようである。次の詩は信濃から越後へ抜ける時の「河中島を過ぐ」と題する作である。

龍虎誰論劣與優 龍虎誰か論ぜん 劣と優、
何人か説筑河洲 何人か説かざらん 筑河の洲。

即今若令兩公在 即今若し兩公をして在らしめば、
也用當年兵法不 也当年の兵法を用いるやいなや。

竜虎戦えば 優劣はなかなか論じきれないもので、「だからこそ」千曲川の洲（川中島）の戦いについて語らない者はいない。「ただ」今もし武田信玄・上杉謙信の両雄が生きていれば、当時の兵法を再び用いたかどうか。

いま二人が生きていたら同じ兵法を用いるかどうか、と常に現在（現実）と対比させるのは、小楠独特の歴史の見方である。

用務をすました小楠は、文久元年（一八六一）十月五日福井を出発し、福井藩の書生七人をつれて帰熊の途についた。次の詩は福井藩の人々が府中（武生）まで見送りをしてくれたのに対し、藩医の半井南陽（仲庵）の詩の韻に和して答えた「福城を發つ。南窓（注・牧野幹）・脩溪（注・長谷部甚平）・南陽の諸子送りて府中に到る。重ねて南陽の韻に次し別れと為す」と

題する詩である。

行看間雲随意收 行くゆく看る間雲 随意に收まるを、

悠悠歸臥故山樓 悠悠歸臥せん 故山の樓。

羽川赤鯉慰民酒 羽川の赤鯉 民を慰さむ酒、

貯待明年黄葉秋 貯えて待て明年 黄葉の秋。

道すがら空を見上げれば雲が気ままに流れ行くのが見える。私も「その雲のように」ふるさとの家に帰り、ゆっくり休息してきます。足羽川の緋鯉、人を慰めてくれる酒。貯えて待つていてください、来年秋の黄葉する時まで。福井での生活は時に望郷の念に襲われるものの、多くの友人や門弟も得られ、小楠にとって悪くないものであったことがうかがわれる。

五 四回目的福井行（文久二年六月）

「漢水舟中」〔後八月望發暴瀉。一時萎衰命殆危。幸頼半井・坪井兩賢得生。快哉之餘賦古風一章爲謝。時廿二日也。〕「和半南陽所寄之韻」〔送元茶陽既歸郷〕「大夫酒井氏別業寓居（三首）」「和野野口生韻」〔偶成〕の計九首。

福井へ 熊本には文久元年十月十九日到着。十一月二十六日禁獵場にて発砲事件（榜示犯禁）をおこしたため、翌文久二（一八六二）年六月まで熊本に滞在。六月十日ごろ四度目の福井藩の招聘に応じ福井へ出発した（三岡八郎・内藤泰吉・横井大平ら六人随行）。次の詩は福井に向う途中、淀川を廻る船中での作。沼山津を終の棲家と定めていたのに、はからずも福井や江戸へと、九度も淀川を行き来することになった晩年のあわただしい生活を回顧する。（『小楠堂詩草』上欄外に文久二年六月二十七日の日付が記されている）

漢水舟中（漢水の舟中にて）

占得生涯在沼山 生涯を占め得て沼山に在り

漁樵日日一身閑 漁樵日々にして一身閑なり。

閑身老去更多事 閑身老い去くも更に多事あり

漢水舟中九往還 漢水舟中 九たび往還す。

沼山津を終生の居と定め、田舎暮らしをして日々のどかに過ごしていた。かく老いていったのに、次々と出来事が起こり、「はからずも」淀川を船で

九度も行き来することになってしまった。

急遽江戸へ向かう。春嶽のブレーンとして江戸で活躍 このあと琵琶湖西岸の道〔西近江路〕をぬけて七里半街道を越前に入ったあたりで、江戸に直行せよと命ずる松平春嶽の急使に迎えられ、小楠のみ江戸へ向かい七月六日着府した。

江戸へ着いた小楠は、将軍後見職となった一橋慶喜とともに、政事総裁職を引き受けて幕政改革に乗り出した松平春嶽のブレーンとして活躍、忙しい日々を過ごすことになった。七月には「国是七条」を幕府に建言した。閏八月十二日、一橋慶喜にも謁見して時務の意見や将軍上洛の必要を述べた。慶喜はいたく小楠の意見に感服し、小楠を幕府に登用せんとする話も出たが、小楠は断っている。この間小楠は閏八月十五日の朝からコロリが発病して、夕刻には危篤状態に陥っている。次の詩は回復の後、この時治療に当たった福井藩医半井仲庵・奥医師坪井信良に与えて感謝の気持ちを表した「後八月望 暴瀉発る。一時萎衰し命殆んど危うし。幸いに半井・坪井両賢に頼り生くるを得たり。快哉の余り古風一章を賦し謝と為す。時に廿二日なり。(文久二年閏八月)」と題する古詩である。

虎乎狼乎鬼乎神 虎か狼か鬼か神か、
吸人五臓及全身 人の五臓及び全身を吸いたり。

我臥此病僅半日 我此の病に臥すこと僅かに半日、

面波手足極老皺 面波だち手足老皺を極む。

半點血水渾去盡 半点の血水すら渾べて去り尽くし、

口唯呼水幾頻頻 口唯だ水を呼ぶこと幾んど頻々。

我命如鷄在今晨 我が命鶏の如く、今晨に在り、

欲托後事無其人 後事を托さんと欲すれど其の人無し。

仰望屋角嘆一聲 屋角を仰ぎ望み 嘆くこと一声、

一聲聲中極悲辛 一声 声中 悲辛を極む。

幸得兩賢天下手 幸いに兩賢の天下の手を得て、

兩肉死骨更覺新 兩肉死骨 更に新たなるを覺ゆ。

不復呼水復呼飯 復た水を呼ばず復た飯を呼び、

欲呼杯酒濡口脣 杯酒を呼びて口脣を濡らさんと欲す。

嗚乎虎乎狼乎鬼乎神 嗚乎虎か狼か鬼か神か、

去々去々勿遽踐 去れ去れ去れ去れ 遽踐する勿かれ。

若過半刻我不許 若し半刻を過ぎれば 我は許さじ、

欲屠汝肉爲佳珍 汝が肉を屠り佳珍と為さんと欲す。

なかなかユーモアのある詩で、最後の「ああ、虎よ、狼よ、鬼よ、神よ！去れ去れ去れ去れ、ぐずぐずするな。半時もうろろしていると、お前を殺して肉をくつてしまおうぞ」など、甦ったうれしさが率直に表現されている。

ところで平石直昭氏も言われるように、本詩の「命殆んど危うし」の状況での、第七句「後事を托さんと欲すれども其人無し」(今は死ねない)という認識は、今現在(文久二年時)において春嶽のブレーンとして自分が日本の混乱の收拾にあたっているという小楠の強い自負(使命感)を表している。この瀕死体験が約四ヶ月後(同年十二月十九日)熊本藩留守居役吉田平之助らと宴会中、刺客に襲われた時、とつさに小楠にその場からの脱出(士道忘却事件)を決意させた要因とつながっているのかもしれない。晩年の小楠にはこういった使命感が強く見られる。「吾輩此道(注・堯舜孔子の道)を信じ候は日本・唐土之儒者之学とは雲泥之相違なれば今日日本にて我丈を尽し事業の行れざるは是天命也、唯此道を明にするは我が大任なれば終生之力を此に尽すの外念願無之候」(慶応三年六月二十六日左平太・大平宛書簡。『遺稿』五〇八)。

九月十五日には元田永孚(号は茶陽)が江戸詰を辞して帰国の途に就いた。元田の『還暦之記』(『元田永孚文集』第一巻、八一頁)にその時の事を「横井先生会々流行病に係りて臥床に在り、余往て之を告ぐ。先生余の帰るを惜み、又五圓金を贈て急を救ひ、更に三十金を借与せらる」と記している。小楠は元田に次の一首を詠んで贈った。

送元茶陽歸郷(元茶陽の郷に帰るを送る)

五十三程秋好時 五十三程 秋好き時、

名山名水入吟詩 名山名水 吟詩に入らん。

傳將臥別平安信 臥別平安の信を伝え將つて、

笑飲沼山酒一卮 笑いて飲め沼山の酒一卮。

東海道五十三次、秋の好い時候、さぞや名山名水があつて詩を詠むのに絶好であろうね。どうか私の病床からの無事の手紙を故郷に伝え、家人と談笑しながら沼山津の酒を一杯飲んでくれまいか。

士道忘却事件 小楠は病気が治ると、京都からの厳しい攘夷の要求に対し、開国か攘夷かでゆれる幕内にあつて春嶽を助けて活躍、十二月二日付けで「破約攘夷」を説く「攘夷三策」を建白したりした。しかし、十二月十五日春嶽が將軍上洛に先立って上京せよと命を受け、小楠もこれに同道せんとする矢先、十二月十九日の夜、熊本藩江戸留守居役吉田平之助・同藩士都築四郎と酒宴をしているところを刺客三人に襲われた。小楠だけは脱出したが、そのことを仲間を見捨てて逃げた、武士にあるまじき行爲として熊本藩から非難され、引取りを要求された。(士道忘却事件) 福井藩では決着がつくまで、これまで通り福井藩が預かるということで、十二月二十二日夜早々に小楠を福井に出発させた。これにより小楠は政治の表舞台から退場を余儀なくされ、また京都に一人で乗り込むことになる春嶽にとつても相談相手を失い、尊攘派が闊歩する京都での複雑な政治展開に対応できず大きな痛手となった。

福井藩筆上洛計画を主導 文久三(一八六三)年正月、福井に着いた小楠は、急なこととて宿舎が用意できなかったためであろう、足羽川河畔の毛屋(現福井市中央町)にあつた福井藩重役酒井外記の別宅(下屋敷)に仮寓した。まもなくここから足羽川対岸木蔵(木倉)にある幸橋詰めの寄留宅(現福井市中央町)に移つたと思われる。幸橋詰めの寄留宅については、現在碑が建つていて有名であるが、従来小楠が一時酒井外記宅に仮寓したことは知られていない。次の漢詩によつてそのことは確かめられる。本詩は挫折(士道忘却事件、福井での居心地の悪さ)の落ち着かない折の一時の安らぎを読む。別邸の春景色を見ながら、酒井家家人の厚いもてなしに感謝する。

大夫酒井氏別業寓居(大夫酒井氏の別業に寓居す) 第三首

日日逍遥園裡春 園裡の春、
 春風迎客興偏新 春風客を迎え 興偏えに新たなり。
 満堂娘子皆知己 満堂の娘子 皆知己、
 幾樹紅花爭向人 幾樹の紅花 争いて人に向かう。
 潑潑魚吹波浪去 潑潑として魚 波浪を吹きて去り、
 嬌嬌鶯弄霽光頻 嬌嬌として鶯 霽光を弄すること頻りなり。
 説來故舊無他事 故旧を説き来たれば 他事無く、
 忘却飄零千里身 忘却す 飄零千里の身。

毎日春の庭を散策していると、春風もやさしく客を迎えてくれ、新鮮な興

趣がいやがうえにもわきおこる。家中のご婦人方はみなさんが置けない人達だし、何本もの赤い「梅の花」が人の目を引こうと研を競っている。魚がバチャバチャ波を立てて逃げていき、鶯が良い声で鳴きながら明るい日の光のもとしきりにたわむれている。旧知の人達の安否を問えば別段変わった事もなく、いつのまにか千里漂泊の身を忘れてしまっています。

四月から五月にかけて、攘夷をめぐって混乱する京都の政治状況を打開するため、福井藩では小楠を中心に、三月に総裁職を辞し京都から帰藩していた春嶽を押し立てて、藩兵を挙げて上洛、その圧力で藩の主張(夷人・將軍・関白をまじえての談判)を朝廷と幕府に言上しようという計画が持ち上がった。その計画の中心人物は横井小楠であつた。五月二十六日には藩議(筆上洛)が決定した。文久三年五月二十四・二十六日在熊社中宛書簡(遺稿)四一七)に「一藩君臣再び国に帰らざる覚悟を極め可申との議相起り、既に執政兩三人は内談致し近日に大評議に懸り可申、此節之義は一と通りの覚悟にて打立事にては無之身を捨て家を捨てるの決定にて、第一春嶽公・當公其御覚悟に御決心無之ては逆も叶はざる事にて中々以て大難事に御座候」とある。そして同年六月六日在熊社中宛書簡(遺稿)四二五)に「先書に得御意候通り実以一藩必死之覚悟にて無之ては十分の献言は出来不申のみならず、決して申通し候事は不相成候。此節は老生一生に再び無之事にて実に尽心肝申候。一兩日あとに一首出来申候。(本詩) 此段迄拝呈余は大略申縮候。以上。六月六日 横平拝」とあり、次の詩が添えられ、小楠の一世一代決死の意気込み及び高揚した気持ち詠む。

偶成(偶々成る)

群嶽亂山總草茸 群岳乱山 総べて草茸り、
 奇觀何處立斯節 奇觀 何れの処か斯の節を立てん。
 愛來大丈夫心事 愛し来たる大丈夫の心事、
 寄在芙蓉第一峰 寄するは芙蓉第一峰に在り。
 ○寄在芙蓉第一峰—この句は「鮫島生の東行を送る」にも見える。小楠の気概を示す。

高低入り乱れる山々にはすべて草が生い茂るばかり。この杖を立てるようなすばらしい眺めの場所はどこにあるだろうか。大丈夫として大切にしていた私の志(「心事」)。その志(杖)を寄せる(立てる)べきところは芙蓉第

一峰である富士山しかない。

小楠の今回の計画にかける高揚した意気込み・覚悟がうかがわれる詩である。

しかし、藩内における挙藩上洛計画に対する疑義や反対も強くなり、七月二十三日藩議逆転。藩内の挙藩上洛派は解任され、それを主導した小楠は春嶽や藩主茂昭の引止めをおしきって八月十一日福井城下を離れ熊本に帰藩した。名君のもとでの改革、朋友のような君臣関係（沼山閑居雜詩）を基本にしてきた小楠にとって、春嶽との信頼関係がゆらいだわけだから、一人福井にいても意味が無いと、帰国しての死（「土道忘却事件」による処罰）も覚悟した決断であったのだろう。反対派の越前藩士が彼を途中に要撃せんと謀るとの風説のためか、夜陰（一に朝かとも伝う）ひそかに寓居を出て足羽川を下って三国港に至り、翌十二日に同港を出帆、海路長崎を経て八月二十五日熊本についた。ちょうどその頃（八月十八日）一橋慶喜・薩摩藩・会津藩など公武合体派のクーデターにより、京都の尊攘派が一掃されたのは、両者の目指すところが違うとはいえ歴史の皮肉である。

七 沼山津に蟄居す（文久三年八月）

熊本に帰った小楠に文久三（一八六三）年十二月十八日、藩から土道忘却事件に対し、知行召し上げ・土席剥奪の判決が下った。これ以降、明治元（一八六八）年四月に維新政府から徴士参与として召命を受けるまでの約五年間、沼山津において蟄居生活を送ることになる。福井藩でも小楠と上洛計画を強力に推し進めた改革派の松平主馬・本多飛騨・長谷部甚平・千本藤左衛門・村田氏寿・三岡八郎・牧野主殿介らは解職・転職・謹慎という厳しい処分処せられている。忽々であったため、これらの人たちとゆっくり別れを惜しむ暇もなかったのであろう、帰郷後福井の人たちと詠み交わした詩は切々として胸を打つものがある。次の詩は三岡安之（三岡八郎、明治維新後に由利公正と改名）が帰熊した小楠に送った詩とこれに和した小楠の詩である。

奉贈小楠先生足下（小楠先生足下に奉り贈る）

承恩深幾尺 恩を承くる 深きこと幾尺ぞ、

古来有似誰 古来 誰にか似る有らん。

思情述不盡 思情 述べ盡くせず、

告只平安詞 告ぐるは只だ平安の詞のみ。

先生からどれだけ深い恩を受けたでしょう。今までこのような方にお目にかかったことはありません。私の思い慕う気持ちは述べ尽くせず、ただご無事での言葉しか贈ることができません。

和三岡安之見寄韻（三岡安之の寄せらる韻に和す）

今代眞名士 今代 眞の名士、

經綸其屬誰 經綸 其れ誰に属さん。

止杯克加餐 杯を止め 克く加餐せよ、

多少不爲詞 多少 詞を為さず。

君は今世の眞の逸物、天下を治め整える才は拔群である。酒を慎み体に気をつけるように。いろいろ言いたいながらも言葉にならない。

挙藩上洛計画が失敗して別れを余儀なくされた小楠・三岡それぞれを思う真情がよく吐露され、二人の緊密な師弟関係を表している。鴻雪爪や長谷部甚平らと詠み交わした詩（「雪爪禪師の送別の韻に和す」「脩溪君より自ら南村と題するの詩を贈られ。次韻して情を述べ、兼ねて雪爪禪師・立軒学士に寄す」）もある。

おわりに

『小楠堂詩草』の最後に福井の藩医笠原白翁から送られた詩に和した「笠原白翁の韻に和す」が置かれている。

心事分明無所疑 心事分明にして疑う所無く、

四時佳興坐傾扈 四時佳興 坐に扈を傾く。

此生一局既収了 此の生 一局 既に収め了わり、

忘却人間喜與悲 忘却す人間の喜と悲とを。

心ははっきりしていて迷いは無く、四季の楽しみを肴にそぞろに杯を傾ける。私の人生の一局はすでに打ち終わり、この世の喜びや悲しみはもはや忘れてしまった。

本詩は前の「城野靜軒・井上某來訪す。時に余痛菌にて相い見ゆる能わず。

謝するに酒肴を以てす」の詩が元治元年五月の作であること、また詩の内容からして、元治元年中の作と思われる。「心事分明にして疑う所無し」は、小楠が福井へ出立の時詠んだ「偶成」の「此の行唯だ心事を尽くさんと欲す、成否は天に在りて人に在らず」と対応し、福井藩招聘以降の激動の人生を振り返って、心事（堯舜三代の治道を実現せんとする）は精一杯つくした。結果は運命であるから後悔はないという小楠の前向きな生き方・達成感を詠むとともに、後半句「此の生一局既に収め了り、忘却す人間の喜と悲とを」からは、なんともいえず諦観もうかがわれ、『小楠堂詩草』を締めくくるにふさわしい詩である。

また、それから暫くたってからの詩であろう。激動の十年を回顧した次のような詩もある。

偶興 第三首

東海波濤北越雪 東海の波濤 北越の雪、

飽看光景百杯傾 飽くまで光景を見て百杯傾けり。

十年無限風塵客 十年限り無き風塵の客、

歸臥故山聽雨声 故山に帰臥して雨声を聴く。

自分は東海の波濤や北越の雪など、飽きるほどそれらの景色を看ながら酒杯を重ね、この十年間いつはてるともなく俗世の塵に塗れながら旅をしてきたが、今ここに懐かしい故郷（沼山津）に帰りついて「ほっとした思いで」静かに雨音を聴いている。

以上、小楠が一世一代の活躍をした福井時代について、漢詩を手掛りにその心情や思想を考察してみた。その結果、病の苦しみ・望郷の念・旅のつらさなどと闘い、かの地の人たちと交情を深めながら、大道（堯舜三代の治道）を異郷福井の地に実現するという理想に燃え、必死に奮闘した彼の折々の心情や様子を読み取ることができた。まさしくこれらの漢詩は小楠の「心の声」（影印本『小楠堂詩草』徳富蘇峰跋文）であった。

思想・政治的には「二典を読む」「偶作」「寓言」など重要な詩が詠まれた。そこでこれらの詩について「沼山閑居雜詩」、「国是三論」、「沼山對話」、「沼山閑話」などの著作と比較・考察、その特色を明らかにした。

五十八首の内容の内訳は、(1)「読二典」「偶作」「偶成」「寓言」「漫興」

などと題する折々の感慨や思想を詠んだ詩が二十一首、(2)春嶽・友人（長谷部・笠原ら）知人・弟子たちと和韻したり・送別の情を詠んだり、訪問・会合での様子や興趣を詠んだ詩が二十六首、(3)その他旅情を詠んだり、題詠などの詩が十一首である。詩型で見ると、五言絶句二首、七言絶句四十四首、五言律詩〇首、七言律詩三首、五言古詩七首、七言古詩二首となっている。七言絶句が圧倒的に多く、対句など技巧が必要な律詩が少ないのは、もともと小楠の漢詩の特徴でもあるが、特に福井時代は贈答詩や旅情を詠んだ詩が多いためでもある。

小楠は漢文による文章は晩年にはあまり書かなくなったが、漢詩だけは福井から帰ってから暗殺される前年まで折に触れて詠み続けた。管見の及ぶ範囲では、三十首以上が残されている。これらの漢詩の考察も小楠研究にとって重要な資料を提供してくれると思う。今後の課題としたい。

注

- (1) 『熊本大学教育学部紀要』第五五号、二〇〇六年十一月。
- (2) 『同前』第五六号、二〇〇七年十一月。
- (3) 嘉永五年正月十五日坂本格・井上司馬太郎宛書簡（山崎正重「横井小楠遺稿」、日新書院、昭和十七年。一六六頁。以下『遺稿』と略記。数字は頁数）。
- (4) 本詩は『小楠堂詩草』（以下『詩草』と称す）には収録されず、横井時雄『小楠遺稿』（民友社、明治二十二年）で挿入されている。『遺稿』は「雜詩」として別に扱う（八九二）。内藤泰吉の原作（安政五年元旦）は「昨夜風東海従り吹き、春光万里一時に披く。江頭の水雪渾べて融解し、満林の花鳥自ら熙熙たり。既に久し二千年の旧国、是の命の維れ新たなるは何れの時にか在らん」である。「是命維新」は『詩経』大雅・文王からの出典で、明治維新の「維新」はこれに基づく。
- (5) 徳富一敬の『小楠翁実歴』（熊本市史編纂委員会編「市史研究くまもと」第三号、平成四年所収）に「其熊城発程ヲ送り、柳川ニ至ル途上、一敬ヲ輪ヨリ呼り、詩ガ出来タ。（本詩）と記す。なお本詩に松平春嶽が和韻して小楠に与えた二首がある。元田永季の『北越土産』（『遺稿』九一八）に、「同子途中之絶句（注：本詩、御和韻御染筆にて被下置候御詩に「恥辱金枝玉葉身、曹騰空過卅年春、自今磨礪券君力、不作醉生夢死人」「経綸條理繫君身、應作一方有脚春、尺素誰裁付双鯉、天涯寄慰白頭人」……とある。
- (6) 二首「詩草」になし。『小楠遺稿』『遺稿』で加える。横井家文書『横井先生詩集』（畏齋先生詩）では「對雨有懷沼山而賦（雨に對し沼山を懷うこと有りて賦す）」と題す。
- (7) 小楠と水戸学については、北野雄士「水戸学と幕末武士層―横井小楠による受容と批判をめぐって―」（『大阪産業大学人間環境論集』第七号、二〇〇八年）参照。
- (8) 安政五年八月八日永嶺仁十郎宛書簡（『遺稿』二七〇）にも同様の主旨の文がある。

- 小楠と熊沢蕃山については、八木清治「幕末思想家と熊沢蕃山―幽谷・方谷・小楠の蕃山理解・受容をめぐる―」（『日本思想史学』一七、一九八五年）、北野雄士「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読―誠意の工夫論を巡って―」（『横井小楠研究年報』第二号、二〇〇四年）参照。
- (9) 源了圓「横井小楠と三代の学」（『文部省科学研究費・重点領域研究「東アジア比較研究」昭和六三年度科学研究実績報告書」）。
- (10) 「詩草」は「誦二典」に作る。最後の一首を「剛」として削除してあるので、『小楠遺稿』で「七首 節六」の文字を加えた。『遺稿』もこれによる。削除された一首は次の通り。「古人之學自分明、不用紛々費議評、二帝授禪作何語、危微一句説心情（古人の学は自ら分明、紛々として議論を費やすを用いず、二帝禪を授くに何の語を作さんや、危微一句心情を説く）」。
- (11) 「書経」大禹謨に「禹曰く、於帝念はん哉。徳は惟れ政を善くし、政は民を養うに在り。水火金木土穀惟れ修り、正徳利用厚生惟れ和し、九功惟れ叙し、九叙惟れ歌い、之を戒むるに休を以てし、之を董すに威を以てして、壞る勿からしめよと。帝曰く、飢り。地平らぎ天成り、六府三事允に治まり、万世永く頼るは、時れ乃の功なり」とある。また、『書経』禹貢にも「六府 孔脩まる」とある。濬川は川をさらって深くすること。『書経』舜典に「十有二山を封じ、川を濬くす」とある。（『堯典』にもある）
- (12) 源了圓氏は小楠の王道的社会観を前期と後期に分け、とくに後期の思想を、彼の「交易」観という視座から明らかにされている。（『王道的社会観の大成』、『横井小楠のすべて』新人物往来社、一九九八年、一四三頁）
- (13) 臯圃謨とあるのは大禹謨の間違いで、小楠の勘違いか、又は記録者の井上教の誤り。
- (14) 平石直昭氏は「彼最晩年の聖人イメージは、近代西洋の産業社会との思想的対決を媒介として再構想されていると言つてよい」と述べて、「主体・天理・天帝（二）―横井小楠の政治思想―」（『社会科学研究』第二五巻第六号、一九七四年、一二九頁）。また源了圓氏は「沼山対話」は、朱子学第の理の觀念を核としてその経綸を表現するなど朱子学を基調としつつも、その中に五行思想の「六府」的読み替えという書経三代の考え方も含まれている過渡的性格をもつものに対し、「沼山閑話」に示された「天」の觀念には宗教的傾斜が見られると、二著の間に一線を引いている。
- (15) 「横井小楠における天の觀念とキリスト教」、「アジア文化研究」別冊一一、二〇〇二年、一〇五頁）
- (16) 小楠は「北越土産」（安政六年）の中で「長谷部甚平杯彼国第一之人才にて、才力敏銳論談任人中々六ヶ敷男に御座候処一度も論談に不及申、毎度異論申述候節は取合不申、直に酒など振舞候て其説には同意出来兼候に付先酒など飲候へと申て雑談に転じ、再三左様に致し候へば毎々甚平より簡を替へ候て参り候故、其上にて同意致候話合調候由に御座候」（『遺稿』九一六）と述べ、「彼国第一之人才」と彼を高く買つて、付き合ひ方に気を配っている。長谷部も「横先生始て対面聞しに勝る大物、其議論たるや光明正大」（長谷部が橋本左内に寄せた安政五年四月十二日付書状。山崎正董「横井小楠 伝記篇」、明治書院、一九三八年、四四九頁）と小楠に心酔する。長谷部とはまた詩友であり、盛んに詩の応酬をしている。
- (17) 安政六年正月小楠が福井から帰熊後、元田永孚が小楠に越前の話を聞き書きした「北越土産」に受領のいきさつ及びこの詩を載せる。（『遺稿』九一九）
- (18) 木の芽峠については松浦玲「中公『日本の名著』シリーズから朝日評伝選『横井小楠』へ」（『横井小楠研究会会報』第一号、二〇〇三年、四六頁）参照。コレラを除くため藩内各地で祈祷が行われた。直接的には八月八日、福井藩でコレラ流行のため祈祷を行い「恐らく疫病であるので狼を祠つた日野宮神社の」疫神齋の御札を領内に配布したことを指していると思われる。『福井県史 年表』（平成十年）に記事が見える。
- (19) 丹巖洞（現福井市加茂河原。現在料亭として用いられている）に小楠の書が残されている。「花景月夕 一醉一吟 四時佳興 人間樂事 小楠」（花景月夕 一醉一吟 四時佳興 人間の樂事なり 小楠）
- (20) 「二首」「五首」の字は「詩草」になし。「小楠遺稿」で加えたもの（『遺稿』同じ）。
- (21) 例えば、早い時期のものとして、平石直昭「主体・天理・天帝（二）（二）―横井小楠の政治思想」（『社会科学研究』第二十五巻第五号・第六号、一九七四年）、源了圓「横井小楠の『三代の学』における基本的概念の検討」（『アジア文化研究』別冊二、一九九〇年）などの論文がある。
- (22) 「横井小楠の『三代の学』における基本概念の検討」、「アジア文化研究」別冊二、一九九〇年、五一頁）
- (23) 朱子が引く宋の邵雍（邵康節）について、小楠自身も「田茶陽の韻に和す（五首）（安政四年秋）」（『遺稿』八八二）で「践み來たる真学紫陽（注・朱子）の道、体得す性靈邵子の賢。何れの日か杯を把りて心事を説かん、秋風吹き老ゆ又今年」と劬子すなわち邵雍の賢を体得したと、邵康節の影響を受けたことを認めている。邵康節は易に精通して梅花心易を創始。数による神秘的宇宙観、自然哲学を説いて二程、朱熹に大きな影響を与えた。邵子と称せらる。邵康節は天地の感応に参入するには我心を抜き去った虚明な境地が必要であり、我々は己を無にすることによって天地感応の生命に徹入することができる。すなわち人欲（個人的利害感情）を消したところに間違ひのない「天理」が現れるのだと言う。佐久間象山も邵康節を尊敬し、その遺文（『邵康節先生文集』）を編纂している。
- (24) 「五首」は「詩草」になし。「小楠遺稿」で加える（『遺稿』同じ）。塗改前の詩は六首書いてある。内藤俊彦「横井小楠「寓言五首」注釈」（『法政理論』第二三巻第三・四号、一九九一年、新潟大学法学会）がある。
- (25) 本詩については源了圓氏が「この詩は小楠の儒者としての側面をよく現わしている」として詳しく考察されている。（『横井小楠における「開国」と「公共」思想の形成』の「B」「公」をめぐる思想史）、『日本学士院紀要』第五七巻第三号、平成十五年、一八九頁）
- (26) 松浦玲「横井小楠 儒学的正義とは何か（増補版）」（朝日新聞社、二〇〇〇年、一六九頁）。「寓言五首」の次の詩「長谷部司計秋日書懐の韻に和す」で、小楠は「人間是れより更に事多し、万牛首を回らして憂うを挽却せよ」と、長谷部ら改革派の重用に風当たりが厳しいことを詠んでいる。
- (27) 三国湊は福井県北、九頭竜川河口にある港。北前船の寄港地として繁栄した。三上一夫氏は「九頭竜川畔の永正寺（浄土真宗、境内には俳人哥川の句碑がある）の本堂裏の茶室には、小楠筆の「山紫水明」の扁額がかかっているが、その部屋の窓から釣りをしたとみられる。このように、かれが福井に魅せられたのは、前述の政治風土性もさることながら、鯨漁の趣味が十分に満足させられたからだともいえる」（『横井小楠 その思想と行動』、吉川弘文館、一九九九年、九五頁）と述べている。
- (28) 大安禪寺は大安寺ともいい、松平家代々の廟所があり、笠原白翁の墓もある。
- (29) 裁錦楼は福井藩家老松平主馬の別邸三秀園にあった建物の名。文政三年頃の建築、茶人藪内宗遠の設計といわれる。三秀園跡は花月橋のふもと、足羽川の北側の市営三秀プールあたり（福井市照手三丁目）にあつて、現在碑だけ残っている。川端大

- 夫は松平主馬の別名。足羽川端に別邸があったからいう（福井県文化財保護審議会委員舟澤茂樹氏の御教示による）。松平主馬は横井小楠の門弟の一人で、挙藩上洛計画では岡部豊後・長谷部基平・三岡八郎らとその実行を主張した。
- (30) 「春嶽は、小楠の教説に接する以前から、『堯舜の道』に深い関心を示したことが、かれの弘化二年（一八四五）の日記『政暇日録』の十一月五日の条に、『輪講これ有り、講師海福敬翹、堯舜の道を樂む事論、誠に面白し』との記事から判明する」（三上二夫『横井小楠 その思想と行動』、吉川弘文館、一九九九年、六三頁）
- (31) 小楠は江戸で終生の友人城野静軒と頻繁に会っている。静軒は菊池隈府の出身、書家としても有名。小楠の世話で、全紙一枚に『論語』全巻を細書したものを春嶽に見せると、春嶽は大変喜んで軸物に表装して返している（文久辛酉七月七日春岳館と自書）。（『遺稿』三二六九参照）城野静軒の日記『静軒日録』全二十四冊は熊本市立博物館に所蔵、閲覧の便をいただいた。小楠のことがしばしば書かれていて貴重な資料である。
- (32) 急使に迎えられた場所については、松浦玲『横井小楠 儒学的正義とは何か（増補版）』（朝日新聞社、二〇〇〇年、三七三頁）参照。
- (33) 『詩草』『小楠遺稿』に無く、『遺稿』第四詩文（三）『雑詩』（八九六頁）に収録。平石直昭氏は「たしかに『後事を託せんと欲して其人無し』という極限的な状況認識、裏返せばそれだけ強烈な自負とそれを基礎する『仁』（注は略）指向が、翌年の遁走を内面的に支えていたと思われる」と述べている（『主体・天理・天帝（二）——横井小楠の政治思想』（『社会科学研究』第二十五巻第六号、一九七四年、一二〇頁）。氏は詩の成立を前年とされているが、これは間違いで、小楠がころりにかかったのは士道忘却事件と同年の閏八月のことである。直近の瀕死経験だからこそ、小楠はよけい死ねなかつたのであろう。
- (35) 『小楠遺稿』『遺稿』では、本詩を「大夫酒井氏別業寓居」の次（福井時代）に移している。鴻雪爪・笠原白翁の名からして、福井時代の作と勘違いしたと思われる。城野静軒の『静軒日録』の第十八冊「文久四年（元治元年）甲子日録」の五月九日の条に井上甚十郎をつれて小楠を訪ねた記事が見える。井上甚十郎は山鹿出身。公選民会議員。明治初期に同じく小楠の弟子である江上津直とともに山鹿温泉場を改築。また製紙改良方法を建築、輸出製茶講習所を設置するなど殖産興業に寄与した。
- (37) 『小楠先生遺墨集』の解説に「福井での驚天動地の計画が裏切られて帰藩した小楠先生が沼山津隠居生活に入つての作。弟子宇佐川知足の請に応じて書き与へられたもの」とある。『遺稿』では『雑詩』に収録（八九三）。